昔話法廷

論点表（手持ち資料）

第5話「舌切りすずめ」裁判

おばあさん（検察側証人）

検察官の質問

・おばあさんは、中の小判が見たくなって、帰り道の山中でつづらを開けた（⇒つづらを開けたのは、おばあさんの意志）。
・山のような毒蛇や毒虫が出て来て襲われ、必死で逃げた。
・足のふくらはぎを噛まれた。実際に痛々しい傷跡が残っている。
・おばあさんはなんとか家にたどり着き、処置をしたから助かった。

弁護人の質問

・おばあさんは、自分が舌を切ったすずめのところに、小判をもらいに行くぐらい強欲。
・山中で発見されたつづらには、唯一「小判を束ねるために使う紙の帯」が残されていた。
・紙の帯には、すずめの指紋も残っている（⇒おばあさんの指紋は残っていないことを、どう考えるか?）。
・おばあさんの傷跡は、たったの1か所。山のような毒蛇や毒虫に襲われたのにおかしい（⇒本当にたまたまだった可能性もある）。
・弁護人は、「おばあさんが、事件をでっちあげた」と主張（⇒しかし、それを示す具体的な証拠はない）。

おじいさん（弁護側証人）

弁護人の質問

・おじいさんにとって、すずめは我が子のように可愛い存在。
・すずめは、人を殺そうなんてする子じゃない（⇒おじいさんの主観にすぎない）。
・おじいさんは、大きいつづらの中に小判が入っていたのを見た。

検察官の質問

・大きいつづらだけフタが少し開いていたので、おじいさんは、中身が小判だとわかった（⇒なぜ、大きいつづらだけフタが開いていたのか?）。
・おじいさんは、腰が悪いので、小判入りの大きいつづらは持って帰らなかった。
・すずめは、おじいさんが腰が悪いことは知っていた。
・すずめは、おじいさんに「おばあさんにくれぐれもよろしく」と言っていた（⇒自分の舌を切ったおばあさんに対して、そのように言うものか?）。
・そう言われたおじいさんは、おばあさんに「もうひとつ大きいつづらもあって、その中身も小判だった」と伝えた。
・おばあさんは、すずめのところに大きいつづらをもらいに、すっ飛んで行った。
・おじいさんは、おばあさんをおびき寄せるために、すずめに利用されている
（⇒すずめは、強欲なおばあさんなら、大きいつづらを取りに来ると考えた）。
・すずめは、おじいさんに中身を見せるために、わざと大きいつづらだけフタを少し開けておいた。
・おじいさんに中身を見せた後、つづらの中身を入れかえた（⇒大きいつづらの中身が小判だったという、おじいさんの目撃証言は完ぺきではない）。
・発見された小判を束ねる紙の帯も、すずめが、大量の毒蛇や毒虫と一緒に、中にカモフラージュで入れた可能性もある
（⇒わざわざ、そんな確実性の低い計画を立てるか?）。

すずめ（被告人）

弁護人の質問

・すずめは、おばあさんが訪ねてくることは知らなかった。
・おばあさんに渡したつづらの中身は小判。入れ変えてなんかいない。
・おばあさんが訪ねて来て怖かった。だから、小判入りのつづらを渡した。
・おばあさんに小判を渡せば、少しでも一緒に暮らすおじいさんの役に立つと思った。
・すずめにとって、おじいさんは命の恩人。かけがえのない人。
・もし、つづらに毒蛇や毒虫を入れておばあさんがそれを家で開けてしまったら、大好きなおじいさんにも危害が及ぶので、そんなことは絶対しない
（⇒検察官が言うように、すずめにとって、おじいさんが利用する対象でしかなかったならどうか?）。

検察官の質問

・すずめは、演歌歌手としてデビューすることが決まっていた。とても期待されていた。
・おばあさんに舌を切られた後遺症で、うまく歌えなくなり、デビューの話は無くなった。
・人生をむちゃくちゃにされたすずめは、おばあさんに強い恨みを抱いた。動機は十分。